

文豪先生

bungousensei

第六話

中川善史

絵・かないてつお





翌日、再び天気は晴れ上がって、水晶のようなまぶしいお昼を迎えていました。

地蔵の目も腫れ上がっています。一晩中目を血走らせていたのです。

前日、文豪先生とろんろんが「地蔵は民子さんにほれちよるばーい」と意味不明なテンションで去っていった後、はたして分教場で先生と民子の間にどんな会話が交わされたのか、それが気になって気になつて仕方がなかつたのです。地蔵はもちろん、文豪先生か



ら地蔵の気持ちを聞いた民子が、

「お、お地蔵様、私のことをそんなに思っていてくださったなんて。本当は・・・本当は、わたしもお地蔵様が大好きだったんです！ 結婚して！」

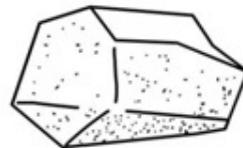
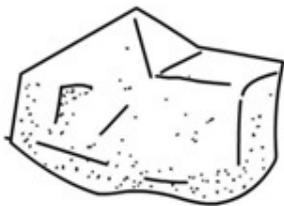
と叫び、泣きながら地蔵のところへ駆けつけてくる・・・ことを信じていました。

そうになると、大安吉日はいつか、新婚旅行はどこがいいか、海外の場合、地蔵にパスポートは発行されるのか、等々、次々と考えなければならぬ問題が生じてきます。

だが、しかし万が一、あつてはならないことですが、あるはずはないのですが、話を聞いた民子が鬼女のような形相になって、

「なに？ 地蔵が私と結婚？ ふざけんじゃないわよ。石の分際でなに生意気なこといってんのよ。碎石場で修行しなおしておいで！」

石の分際表

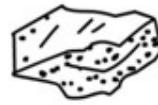


左から 1号碎石、3号碎石、5号碎石、くず石

と返事をしていたら、どうなるでしょう？

地蔵は、「あるはずがない」と「万が一」の間で、一晩中、心の戦いを繰り広げていたのです。

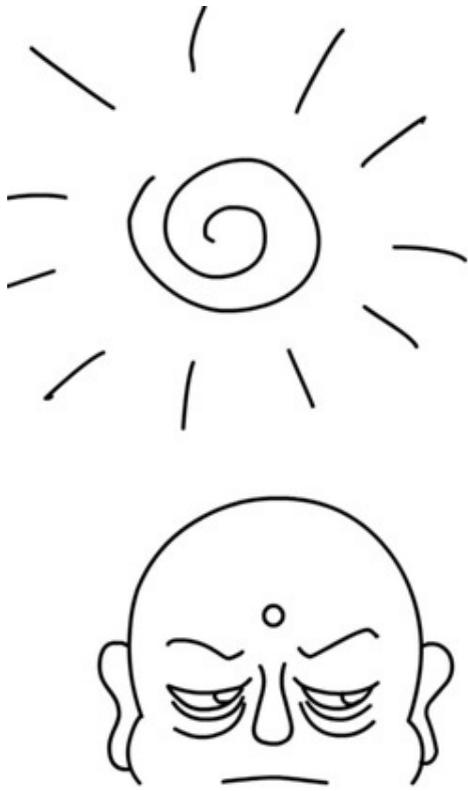
ところが、いくら待っても、文豪先生は、どちらの返事ももたらしてくれません。いらいらとした気持ちのまま、夜は明け、午前中が過ぎても文豪先生は現れようとしません。



お日様が頭の上に来て、地蔵が腫れ上がった目蓋を一万五千六百七十三回しばたかせたころ、道の向こうに呑気そうに歩いてくる文豪先生とろんろんが見えてきました。

「お、おい、文豪先生、ろんろん、なにしてんだ」

ろん 「あら、お地蔵はんたら、なにしてんだ、ゆうてはりますわ」
文豪 「なにしてるゆうたかて、見ての通り歩いてんのや」



ろ 「歩いてるのはわかってますわ。歩いてどこ行かはるのか、聞いてますのやわ」

すのやわ」

文 「どこ行くて、ここまで来たら、地藏んところ行くよりしやあないやないか」

ろ 「お地藏はんところ行つて、なにしますのや」

文 「地藏んところ行つて・・・なにするんやったかいな」

ろ 「頼りない人やな、思いだせんのかいな」

地藏の方は、声を押さえつけて、

「あんた達、なにをやっているんだ」

先生の方は、カラスが脳天にとまつたような声で気楽そうに、

「今朝ラジオで、いとし・こいしの漫才

をやっつけていてな、それから、うちでちよつとした上方漫才ブームなんだ」

地蔵は呆れて、

「お前たちの辞書には、悩みという文字はないみたいだな・・・そんなことより、昨日はどうしたんだ、昨日は」

ろ「お地蔵はん、昨日ゆうてはりまつせ」

文「昨日ゆうたら、今日の前の日や」

ろ「そうや。明日ゆうたら今日の次の日や」

地蔵のこめかみの血管がぷちつと音をたてました。

「漫才はやめろー！ 民子さんはなんて言ってたんだ、民子さんは」

「民子さん・・・そうそう、これから、ここへ来るんだよ」

「なんだと。なぜ、そんな大事なことをもつと早く言わないんだ。

なにしに来るんだ」

「あんたに会いに来るんだよ」

それを聞いて、地蔵の心臓が、どつどつどつ、と高鳴り始めました。（地蔵に心臓があればの話ですが）

文豪先生は、

「うーむ、なにから話したもんかな」と腕組みをして瞑目しました。

【これより、文豪先生回想シーン】

昨日の例の漢字のテストの放課後、砂府青年と文豪先生とろろんは、分教場の広い校庭をぶらつきながら話をしていました。

「先生、追試は受けに来てください」

と、砂府青年が言いました。

「うーん」

「まあ、本当を言えば、先生に分教場に来ていただけの口実ができたというところですけどね。『お昼ご飯をもらいに来た』というより、追試に来たという方が見栄えがいいじゃないですか」

「ええ・・・いや、よくない」

とはいうものの、文豪先生は、追試には来なくてはなるまい、と思っていました。

なにしろ、分教場の全生徒が見ている前で、零点を取ってしまったのです。ただでさえ、凶々しくご飯を食べに来たいやしいおじさ

んという評価が定着しつつあるのに、その上、実は大人の癖に小学生の漢字のテストで零点を取ったバカだったという評価まで上乘せられてはたまりません。

子供から親へ、親から世間へと悪評が伝わって、小説は売れないのに悪評だけは轟き渡っているという事態だけは避けたいところです。

「文豪先生！」

そこへ、校舎の方から夏目民子が走ってきました。

「すみません。さつきは、ろくにお話もできなくて」

「いそがしそうだね」

「まだ、立ち上げたばかりで、やることがいっぱいあるものですから」

「今朝の菅笠のこと、地蔵は喜んでいたよ」

民子は明るい微笑みを浮かべました。

昼休みに見せていた憂い顔はもう微塵も見



られません。

「お地藏さんは雨の中に濡れていても普通のはずなんですけれど、ああやって言葉を交わしちゃうと、わたしにとっては、ただのお地藏さんじゃなくなりますよね」

「さつき、屋根を付けてあげたいといっていたな」

「うーん、自己満足かも知れないけど、なにか簡単なものでもプレゼントしたいですよね」

【文豪先生回想シーン中断】

「そ、そ、そ、そう民子さんが言ったのか？」と地藏。

「ああ、言ったぞ」

「俺にプレゼントをしたい、と」

「うん」

「女の方から告白か・・・俺も、江戸時代に生まれて、明治、大正、昭和、平成と世の中を見てきたが・・・最近の若い子は積極的だねえ」

「そういうことでもないと思うが」

「それから、俺のことを、彼女にとって、ただの地蔵じゃない、と言ってたんだな」

「確か、そう言ったな」

「この世でただひとりの、ワン・アンド・オンリーの、大切な大切なお地蔵様、マイ・ラブ、と」

「そこまでは言っていない」

「じゃあ、今日、プレゼントを持ってくるわけだ。チョコレートかなんか」

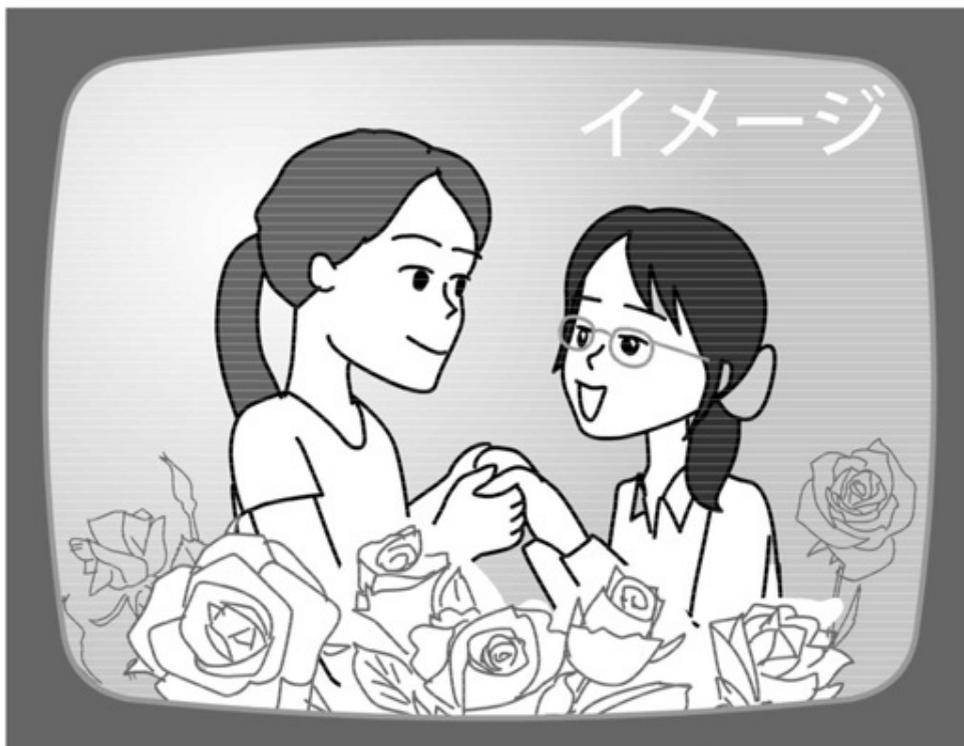
「いや、そうじゃないんだ」

【文豪先生回想シーン再開】

民子がそういった時、

「じゃあ、われわれで何か作っちゃいませうか」

と、提案したのは、砂府青年でした。



【文豪先生回想シーン中断】

「なに？」

と、地藏は、ぴくりと眉を上げました。

「ちよつと、待て。誰だ、その男は。なぜ、気安く

民子さんに話しかけるんだ」

「砂府均と言つて、旅人としてこの村にやってきたら

しいんだが、今では分教場と村役場で働いているんだ」

「す、すなふきん？」

「すなふ・ひとし、だ。口で言っているのに

なんで読み間違えるんだ」

「どんな男だ」

「まあ、背が高くて爽やかな好青年だな」

「すえがたかくて、すわやかな、くおうせいねん？」

「背が高くて爽やかな好青年」

「俺と比べてどうだ」

「あんたは、背も高くないし、爽やかでもないし、好青年でもない。

根こそぎ違う」



「地獄へ堕ちろ、そんなやつ」
「あんた、仮にも仏がそんなこと言っているのか……まあ、話は最後まで聞け」

【文豪先生回想シーン再開】

「村のどこかで廃材でももらってくれば、材料費もかからない」
「そうね、それ、いい考えだわ。さすが砂府さん、頼りになるわ」と、民子は砂府を見てにつこり笑いました。

【文豪先生回想シーン中断】

「さすが、すなふさん、だとおおお？頼りになるだとおお？ 民子が砂府を見てにつこり笑ったあ？」
「もう、いちいちうるさいな」



「ゆ、ゆるせん。その男」

「いいから、ちよつと黙って聞いている」

【文豪先生回想シーン再開】

「明日は、土曜だし、分教場が終わったら、ちよつとそのお地蔵さんを見に行きますか。ぼく、まだ、そのお地蔵さん見たことがないんです」

「そうね。そうしましょう!」

「お地蔵さんの大きさとか計らせてもらって、それで図面を引いちゃいましょう」

「いい! いい! 意外に早くできちゃうかも」

【地蔵が興奮して乗り出してきて、また回想

シーンが中断しそうになっておりますが、無理矢理押しとどめて話を続けます】

「文豪先生もいらしてくださいますか」と、民子。



「ああ、もちろん」

彼らの足が、ふと止まりました。行く手に男の子が一人立っています。先ほど教室にいたいがり頭の子です。

「なんだ、幸太、まだ帰らなかつたのか」

幸太はもじもじしていましたが、ぶっきらぼうな調子で、

「俺も、一緒に行きたい」

「ああ」

と、砂府青年、なにか腑に落ちた様子で

「幸太も一緒に作るか」

「うん」

「よし、じゃあ、明日の朝、ここに集ろう。いいか」

「うん」

それだけいうと、幸太はくるつと向こうを向いて走っていきました。家の方へ行くのでしよう。その後ろ姿を見送りながら文豪先生は、

「内気な子なのかな」

「いや、先生に人見知りしたんでしよう。馴れれば気軽に話すと思

うんですが」

と、砂府は笑いながらも頼もしげに、

「あの子は、図工の時間のスターですよ。他の勉強は苦手ですが」
「ほう」

「小さい頃から、木っ端と小刀を与えていれば、ひとりで何時間で
も、色んなものを作って遊んでいたそうです」

「そういう工作が好きなんだな」

「あの子の父親というのがすごい人で、
江戸時代から続くからくり師の系譜を

引く人なんです」

「からくり、というと、人形がお茶を運んで

くるようなやつかな」

「ええ、人形の形をしているのもあるし、いろいろです。」

ともかく、板バネとかゼンマイとかおもりとか、そういった動力で
驚くような動きをするからくりを作るんです。あれこそ、村の重要
無形文化財ですよ。文豪先生も民子ちゃんも、この村に来たからに
は、いちど会っておくべきだな」



「なるほど、物作りの血を引いているのか。彼も将来、からくり師を継ぐかもしれないんだね」

「それで、お地藏さんの話を聞いて自分も手伝いたいと思ったんでしょね。僕たちよりもよほど役に立つと思いますよ」

【文豪先生回想シーンおわり】



「それから？」と、地藏が下からにらみ上げてきます。

「それから、だな・・・まあ、伝統のからくり人形というのは、すごいもので、からくり仕掛けで人形が弓で矢を放つたり、踊りを踊つたり、階段を下りてきたりと、日本に近代工業が入ってくる前からそんな技術を・・・」

「そんなことはどうでもいい。その後のことだ」

「うむ、その後はだな、うちに帰って、そうしたら、ろんろんが昼

のキノコ汁の残りをもらってきただんで、これで今日は一食どころか二食助かったな、と大笑いになって、そのあと私は風呂に入って読書して、ろんろんはハムーの世話をしたり遊んだり、そうだな、それで寝たのが何時頃だったかな……」

「そんなことは、もつとどうでもいい！……民子さんと砂府とかいう野郎はどうしたんだ」

「それは知らんよ。また、仕事に戻ったんじゃないか」

「くそう。仕事だとか言つて、陰でなにこそそやつているか、わかったもんじやない……ああ、神よ、民子さんを砂府の毒牙から守り給え。砂府に罰を与えたまえ」

「あんた、なにか妄想を暴走させているな。宗教、ごちやごちやになつてゐるし。仏が神に祈るつてのはありなのか」

そこへ林に向かう道のカーブの方から、民子、砂府、幸太の三人が姿を現しました。民子がこちらを見つけて、大きく手を振っております。

「あ、来た来た。おい、地藏よ。真ん中の背の高いのが砂府君だ」

「あー、民子さんだ。民子さんの笑顔はいつ見てもいいなー。ああ、小さいのが幸太という子供だな。あれがからくり師の子供か。なるほど、そうか、ふんふん」

「あんた、意識的に砂府君に触れまいとしているな」

「ふん。別にそういうわけじゃないさ。まあ、なんだな、こうして実物を見てみりや、イケメンと言うほどでもないな。まあまあつてところか。いや、まあまあどころか、並……いやいや、並以下……いや、最低線……水面下……深海魚……マリアナ海溝……」

「すみません、おそくなつて」と民子。

「いやいや」と文豪先生。

「お地蔵様、こちら砂府さんです。地蔵堂、というのは大げさですけど、お地蔵様が雨に濡れないように屋根を作つて差し上げようとしてくれました」

「出たな、マリアナ海溝」

「え？……はじめまして、砂府といいます。分教場と村役場で仕事をしています。あ、それからこの子は」

と、幸太の肩に手をおいて、

「杉本幸太といつて、分教場の五年生。僕らの棟梁です」

すると、幸太は、頭も下げずに肩に提げたカバンの中からノートと鉛筆を取り出して、いきなり地蔵のスケッチを始めました。

「おいおい、挨拶くらいしろよ」

と言われると、鉛筆を走らせたまま頭だけひよこつと下げます。

「すみませんね。こいつ、すぐ夢中になるんです。今日は、いろいろ準備作業をさせてもらいます」

「くれぐれも失礼のないように」

と地蔵が自分で言います。

「どんなものを作るのかね」と文豪先生。

「最低限、ソファとブルーレイ内蔵の

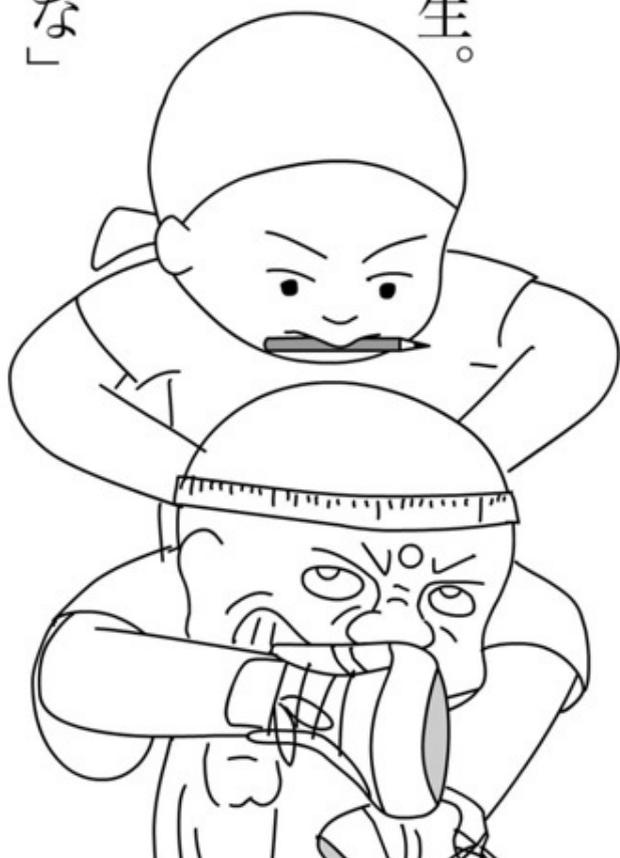
テレビと大型冷蔵庫は欲しいな」と

地蔵。

「それはちよつと無理です」と砂府。

「まあ、金網で囲うことは必要だろうな」

と文豪先生が言うのと、砂府が、



「そうでしょうか」

「うむ。あと、水飲み場と青菜の入れ物だな。それから地面を掘って逃げ出さないように下を固めておく」

「それじゃウサギ小屋ですよ」

「賽銭箱」と、ろんろんがいます。

「賽銭箱はどうかなあ。お金の管理を誰がするの」

「ろんろん。地蔵の世話も、ろんろんがやる。ハムーと文豪先生の世話でなれてるからな」

「私をハムーと同列に置くな」

「俺をハムーと文豪先生と同列に置くな」

「同列に置いてはいないぞ。ハムーの世話が一番神経を使うぞ。何しろ繊細だからな」

「とりあえず賽銭箱は却下。まあ、屋根を作って、後ろと両脇の三方に簡単な囲いというところかな」

大人達がそんな無駄話をしていくうちに、幸太はまえから、後ろから、横から、と絵を描いていきます。それが終わると、今度は巻き尺を出して、地蔵のあちこちのサイズを測り始めます。全く無

駄口を叩くこともなく、黙々と集中して作業を続けます。

幸太が地蔵にぴったりくつついて、サイズを測っている時でした。地蔵が、

「おい、幸太。砂府がいうような簡単な工作でいいのか」

と、他のものに聞こえないように幸太に耳打ちしました。

「え？ だって、俺、砂府先生がいうように作らなきゃ」

「しつ。小声で話せ・・・お前は、それで満足できるのかよ」

「満足って、どういうこと？」

「なあ、お前は将来、親父のようなからくり師になりたいんだろう？」

「え？ なんて、そんなこと・・・」

「なりたいのか、なりたくないのか」

「そ、そりゃ、なりたいさ」

「じゃあ、砂府が言ってるようなのより、もつとすごいを作ろうじゃないか」

「でも・・・」

「いいんだよ。とりあえずは、あいつが言っているとおりに作っておいて、あとから、親父もびつくりするようないからくり仕掛けをくつつけるのさ」

「ど、どんな？」

「まずは、だな……動けるようにする」

「え？」

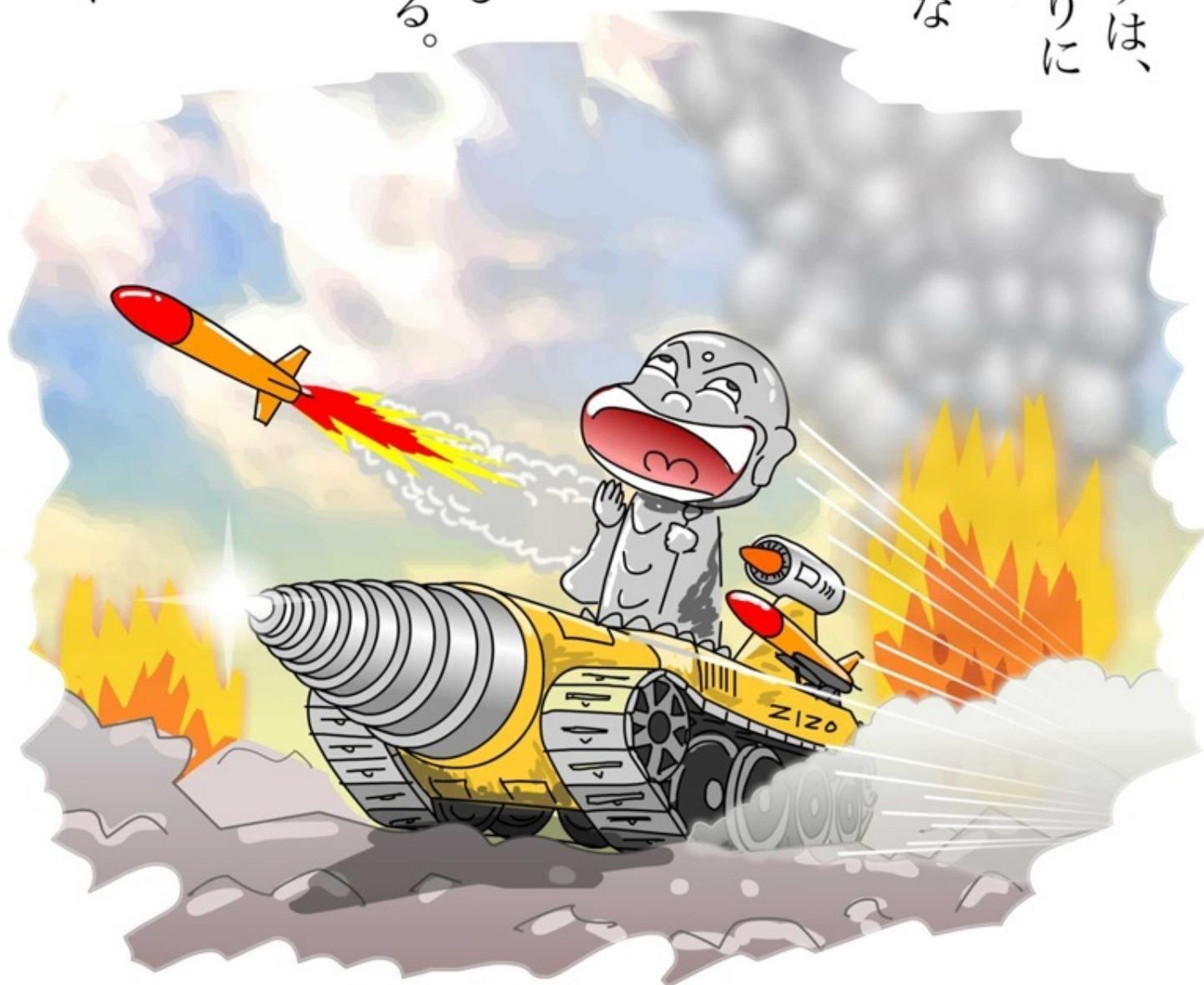
「車でもキャタピラーでもいいから動けるようにする。それからだな……」

「ロケット砲だ……」

「ろ、ロケット砲？」

「な、なんで？」

「なんでもいい。ともかく



強力なやつだ」

「そ、そんなことしたら、俺、叱られるよ」

「ほう……」

と、しばらく地蔵、考えていましたが、

「君、私のいうことに逆らうのかね」

「ど、どうしたの、お地蔵さん」

「君、みんなに言えないで秘密にしていることがあるでしょ」

「……え？……なんで、お地蔵さんが知っているの？」

「お地蔵さんは、なんでも知っているの。ばらしちゃって、いいのか？」

「そ、それは困るよ。恥ずかしいよ」

「じゃあ、お地蔵様の言うこと聞きなさい。わかったね」

「なんで、お地蔵さんは、そんなからくりが欲しいのさ」

「それは、言えまへーん……この作戦は俺達の秘密だからな。作戦コードネームは『スナフキンがタミーに近づいたらゆるしまへんでスペシャル』だ」

「なんか、すごく説明的なコードネームだね」

「人に言ったら、ダメよ。君のあのこと、ばらしちゃうからね」

あとで、ひとりになった時、幸太はひとりごちました。

「なんで、お地蔵さん、俺がみどりちゃんのこと好きなの知っていたんだろう。でも、そんなことばらされたら、俺、恥ずかしくて分教場行けなくなっちゃうよ」

あとで、ひとりになった時、地蔵はひとりごちました。

「幸太のばらされたくない事って、なんだったんだろ。適当にカマかけてみたら、みごとにツボに入っちゃったみたいだな」

さて、一方的に砂府に敵意を燃やす地蔵。「スナフキンがタミーに近づいたらゆるしまへんでスペシャル」は炸裂するのかわ。砂府の生命やいかに。そんな緊迫感あふれる物語でもないはずなんだが、続きは次回で。



文豪先生 第六話

<http://p.booklog.jp/book/36688>

著者：中川善史

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kanaitetsuo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36688>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/36688>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ